

学位記授与式式辞

令和 5 年度数学・数理解析専攻数学系

加藤周

皆様、この度は卒業おめでとうございます。

生憎の天気とはなりましたが、今年度はようやくコロナに伴う制限が完全に解除され修了式後の懇親会まで含めてコロナ前の状況に戻り、コロナ禍の全期間を京都大学の学生として過ごされた皆様に対してようやくあるべき姿の修了式によって皆さんの卒業をお祝いできることを嬉しく思います。桜も芽吹きはじめ、春も近づいています。

さて、数学という学問はある意味の究極の積み上げ型学問で、さまざまな事柄を基礎から学び身につけるために大量の時間と落ち着いた雰囲気が必要とすることはここにおられる皆様には既にご理解いただけていると思います。その中で皆さん自身新しいことを吸収するため色々と試行錯誤されたことと思いますが、そのような経験は卒業後どのようなことをしても生かすことのできるものだと思います。

皆さんが在学中におきた広い意味で数学と関わる社会の変化として形式証明の発達と生成 AI の出現があると思います。前者は、定理の証明の正誤のコンピュータを用いた判定が進化し、相当難しい定理まで公理からきちんと演繹できるかが判定できるようになったという話で、後者は大量の非自明な等式やとても難しい初等数学の定理に対する証明が人間の介入なしで与えられるようになったというものだとは私は理解しています。

これらはどちらも数学を含む現代科学、現代社会のありようについて根本的な変化を与える可能性を持つものです。例えば数学では欲しい証明は命題を正確にタイプした瞬間にわかるようになり、計算したい問題を与えれば洗練された公式が証明つきで出てくるようになるかも知れません。その時代には他の多くの分野でも大抵のことは欲しいことを正確に書けば適切なこたえが機械生成されるようになるでしょう。

ただ、仮にそういう時代が来たとしてもどのような命題をどのように考えて説明するのが良いかといった大枠の部分は人間が人間として世界の一部を理解するという文脈の中では残ってゆくと思います。そういうことから皆さんが大学で獲得された数学に関する感覚の価値は、他の人の真似ではない新しいことを切り開くという文脈の中で高まってゆくのではないのでしょうか。ただ同時に自分の考え方を変化させることを受け入れ、パターン化できない新しい世界へと進んで行かなければ知的労働者としては機械生成された託宣、そして自動化されたサービスのレベルを越えられなくなってしまうという未来が待っているかも知れません。